
涼宮ハルヒの創世

OB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涼宮ハルヒの創世

【Nコード】

N5848H

【作者名】

OB

【あらすじ】

目を覚ますとそこは牢獄。キヨンは古泉一樹に涼宮ハルヒの暗殺命令を出される。夢なのか現実なのかわからない世界でキヨンはハルヒと出会う為様々な世界を旅する。

第1話

心地よい目覚めのはずなのに、俺は目覚めた場所にじっくりこない。

周りはコンクリートで出来た箱状の部屋。目の前は鉄格子で牢屋そのものだ。

「俺は何かしたのか？」

俺はごく普通の高校生のはずだ。

昨日確かに俺は落ち着く自分の部屋でぐっすりと寝ていた。

なのになんだ？ この悪夢のような展開は、どうせなら朝比奈さんとデートする夢でも見たいもんだ。

悪夢から覚めようと壁に向かって頭突きをしていた最中に足音が響いた。

「おや、自殺願望ですか？ それは困りましたね、あなたに仕事があるんですが」

俺の前に現れたのは古泉一樹に似た警官の服を着ている男だった。

「あなたの仕事は涼宮ハルヒを暗殺してもらうことです」

おいおい、いきなり物騒な話をするもんだ。しかもハルヒだって？

「彼女の横暴なやり方には市民全員が不満を持っているのです」

「市民？」

「ええ、ここは都市部に近い大きな街です。涼宮ハルヒは市長の実権を握り好き放題やっているんですよ」

困ったような爽やかそうな表情を見せないでくれ、腹が立つ。

「あなたも元々涼宮ハルヒの手下ですから罪滅ぼしと足を洗うことができるチャンスですよ」

笑顔で渡された物騒な拳銃とナイフ、本格的で嫌気がさしてくる。こんな悪夢の中でもハルヒの手下扱いとは随分とやなことだ。

「首に装着したアクセサリはセンサーです。もしもこの街から逃走した場合は僕の仲間から銃弾を浴びることになりますから気をつけて下さい」

恐ろしいほど爽やかな笑顔とその発言に背筋がゾツと寒気がした。日が暮れる時間帯にまたあの古泉に似た男がやってきた。

「なあ、あんた名前はなんていうんだ？」

「古泉一樹です」

そうかい……。コレは夢なのか？

「さて、そろそろ時間ですね。この収容所からまっすぐ行くと市長の家がありますそこに涼宮ハルヒはいます」

収容所から出され俺はまっすぐ森林の中を歩く。

もしこれが夢じゃなかったらきつと長門かハルヒが関連するはず。会って話をしないと。

何かあるんじゃないかと少し神経を張り巡らせて歩くも全く何もなく、無駄に疲れた。

市長が住む家らしい豪邸に着くと俺はしばらく動けなかった。もしもだ。俺がハルヒを殺してしまえばどうなる？ 誰かが創った世界でも本人そのものだったら元の世界に戻ったときハルヒは生きているのか？

額からなぜか嫌というほど大量の冷や汗が出る。

いや、きつとコレは悪夢だ。こんなことありえるわけがない。そう決意した俺が扉を開けた瞬間だった。

「なんとおおお！！」

間一髪俺は後ろに反り返り鋭意のようなものを避けた。

開けた瞬間何かが飛んできたのだ。俺は体勢を整え正面を見た。

「……………」

「長門！？」

ナイフを持ったままの長門有希が俺を殺意を込めて睨みつけている。

黒い制服と短いスカート姿の有希は今にもナイフを投げそうな体勢でいた。

待て待て！ シャレにならん。

「長門何をしているんだ？」

俺の声と体が震えて止まらない。

「涼宮ハルヒの目的を阻むものは仲間でも殺す」

言葉を発して数秒も経たないうちに俺の目の前まで近づく。
速すぎるぞ長門。せめて話だけでも聞かせてくれ。

「ハルヒの目的はなんだよ！」

「……世界の創世をすること」

長門の持つナイフが俺の頭をかすり扉を破壊した。

おかしすぎる。世界の創世ってなんだよ。

粉々になった扉は原型さえ残っていない。こんなにくらったら怪我だけで済まないぞ。

「私はあなたを許さない」

俺の腹部にいつの間にか長門の脚があった。

「うぐっ！」

考える暇はなく、腹部から全身に衝撃が響き外へ蹴り飛ばされる。
地面に衝突し俺の体に強烈な痛みが突然走った。

「げほっげほっ！」

痺れて動けない他折れたんじゃないかというほど骨が痛い。

ヤバイ、意識が朦朧としてきた。長門の奴、手加減なしかよ……

――。

「……」

第2話

「……………」

あまりの激痛にどうやら意識を失っていたらしい。
起き上がると白い煙が周りの景色を隠していた。

「あいてて……。えつと長門有希さん？」

とりあえず長門を呼んでみるが応答はない。どうやらないようだ。
煙が消えると俺は言葉を失った。

さつきまであった市長の家や街が無くなっていたのだ。
後ろを振り向けば森がない。その向こうにあるはずの収容所も……。

「ここは何処だ？」

「涼宮ハルヒの邪魔をする者は誰であつても排除する」

聞き覚えのある声に俺は訳も分からず走った。

「なんでいるんだよー！？」

「……………」

「うっ！」

走っても無駄だと分かっていたさ、長門から逃げることは無理だつてことに。

時空移動したかのように俺の目の前に立ちふさがる長門。

ポケットの中を探るが、古泉からもらった武器がなかった。

「さっきまであつた街は？ 家は？」

冷汗を掻きながら俺は長門に尋ねた。

「排除した」

冷たく殺意のない言葉。ならなんで俺はいるんだよ。

「涼宮ハルヒからの命令によりあなたを殺害することは消えた。あなたに涼宮ハルヒとの接触を命じる」

涼宮ハルヒとの接触？

長門は簡潔に説明を始める。

「涼宮ハルヒに接触した場合あなたは元の世界戻る。期限の1週間を超えた場合涼宮ハルヒの計画は実行されあなたも排除される」

そう言つて長門は姿を消した。

「おい！ もっとヒントをくれよ」

長門が消えた代わりにナイフが置かれていた。

サバイバルでもするのかよ。俺は見覚えのない地を歩き始めた。

街などない世界であるのは岩でできた山と崖のみだ。まさにグラウンドキヤニオン。

果てしない空を見上げると、現実世界では存在するはずがない生き物が飛んでいる。

飛竜って奴だろうか気づかれたら食べられるだろう。それだけは勘

弁してくれ。

「すいませーん」

遠方から天使のような可愛らしい声が聞こえる。

振り向けば、それはそれは可憐な朝比奈さんがこちらに向かって来ている。

「朝比奈さん」

思わず声が出てしまう。

首を傾げる朝比奈さんを見て俺はここに来て初の癒しを感じる。

「なんで私の名前を？」

「いや、知り合いに似ていたんでつい」

なんとか誤魔化し、俺はとりあえず朝比奈さんの用件に耳を傾けた。

「あの、実は最近ここの近くに見知らぬ女の子が現れるんですが、飛竜がいるので危ないんです。ですから、あなたから注意をしていただきませんか？」

朝比奈さんのお願いならどんなことも容易いですよ。

俺は快く引き受けた。

うーん俺っていい人。

朝比奈さんと別れたあと、俺は女の子を探すため辺りを歩く。

歩いて5分くらいだろうか崖の辺りに少女が佇んでいるのを発見。声をかけると見覚えのある少女だった。

見覚えがあるだけじゃない俺の脳にはくつきりと少女の顔が嫌とい

うほどインプットされている。
あきらかにあいつだ！

「ハルヒ！」

「……」

なんか様子が変だ。
ハルヒだよな？
うんハルヒだ。

心の中で自問自答して俺はハルヒに近づいた。

「鬼ごっこする？」

「は？」

「するわよね？」

相変わらず傲慢な態度だなおい。
鬼ごっこってなんだよ。

「女の子だけど子どもじゃないよな？」

「変化自在ってやつ？」

ああ納得。じゃねえ！

「あたしを捕まえたら元の世界に戻してあげる」

それ早く言えよ。

ハルヒは崖から飛び降り、姿を消した。

「……この際何でもやってやろうじゃないの！」

ああ、俺の頭狂ってきたなあ。

第3話

崖の真下は激流の川、ハルヒの奴なんでここから飛び降りれる！？

「ここで捕まえないと次の場所に行っちゃうわよ！」

はっ！ 落ちても大丈夫なら俺も……って無理だろ。

「……な、なせばなるウウウ！」

これは夢そう悪夢だ。

落ちればきつと心地よい目覚めが待っている。

俺は意を決して崖から飛び降りた。

「近づけ！」

自分に言い聞かせ空中で泳いでみせた。

結果徐々にハルヒに近づいている。

このままいけば捕まえられるぞ！

「殺害はしない。ただ妨害はする」

ハルヒに触れる寸前のことだった。

長門、頼むからナイフを持つのはやめてくれ。背後にいる長門は俺の襟首を掴むと、ハルヒを通り越して川へ一直線。

「バカアア！ 死んじまうだろうがああ！！！」

「平気」

お前は平気でも俺は平気じゃないぞ。

「さよなら」

俺死んだな……。

激流の川へドボン。

「……はっ！」

どうやら意識を失っていたらしい。

水浸しの制服を絞り、俺は生きていることを確認。

まったく飛龍に襲われず済んだし、ナイフすら使うことが無かった。

「何処だよここは？」

辺りを眺めると、どうやら木々に囲まれた森らしい。

念のためポケットに手を入れてみると古泉からもらった拳銃が入っていた。

「ってことは……」

「任務は達成出来なかったようですね」

背後から異様に爽やかな声が聞こえた。

「古泉！」

「あなたは任務失敗の責任として死刑執行です」

笑うな、気持ち悪い。

いやいやまてまてそんなことより死刑執行ってヤバイぞ。

「銃殺刑です」

だから安心してくださいという顔は一体なんだ？

古泉の背後には拳銃を持った死刑執行人らしき奴等。

「長門！ いるんなら答えてくれ！ 撃たれたらどうなる！！」

返事はないか。

古泉はム力つく笑顔のまま首を傾げていた。

死刑執行人の不適な笑みと拳銃に俺は目を閉じる。

発砲音が聴こえたが弾は俺に当たっていないのか痛みはない。

もしかしたら痛みもなく死んだのかもしれない。

俺は目を開けた。

「長門……」

「世界修正の途中涼宮ハルヒが行方不明となった。本来あなたはそのまま撃たれて消滅する予定。あなたには涼宮ハルヒを発見しだい元に返すことを約束する」

また予定変更かよ。

しかも今度は本人が行方不明になったのか。

「あなただけが頼り」

そう言われるとなんか照れるな。

しかし、ハルヒをどうやって探せと？

長門は啞然とする死刑執行人と笑みの崩れない古泉に背を向けて俺に近づく。

「この世界を完全消滅させる」

は？

俺が何か言おうとした瞬間地面が揺れ始めた。
森林の木々がなぎ倒され、地面に亀裂が入る。

「どうなつてんだよ！」

なんとか立とうとするが激しい揺れに動くことができない。

「平気」

平気なわけあるか。

死刑執行人と古泉の姿がない。

「消滅した」

「古泉は、本物か？」

「あなた以外の人物は全て架空」

「この世界はハルヒが創造した世界だよな、なんで行方不明になるんだよ」

空は荒れ始め、雷雨が降りだす。

俺はまたずぶ濡れになりながら直立不動の長門に思い付くかぎり質問していく。

「私にもわからない」

「架空ならハルヒもお前もそうなのか？」

「……」

なんで答えてくれない？

無表情の長門に体の震えが止まらない。

「なが……！？」

長門が俺の視界に映らなくなった。

思考が数秒遅れ、俺はようやく理解する。
自分が落ちていくことが。

「うああああ！？」

空が遠くなるにつれ俺の意識も遠退く。

うつすらと思い出すのは普通の日常の中で暴れまわるハルヒとその
様子に困惑しつつ楽しむSOS団。

第4話

「はっ!？」

勢いよく目を開けて俺は起き上がった。
生きている。

ものすごい安堵とぐったりする体に俺は嫌になる。

「地面が割れて落ちたんだよな……」

とにかく辺りを確認する。

あれ？　ここ学校。

見覚えのある教室の景色に悪夢は覚めたのかと思ったが、残念なことに悪夢はまだ続く。

俺に背を向け黒板の前に立つ長門がいた。

「長門」

声をかけてみるが振り向いてはくれない。
近づくべきなのか悩む。

「……涼宮ハルヒの創造を邪魔する者は排除」

長門が振り上げた片手にはナイフ。
そして黒板を一刀両断。

ウソオ。

しかし、驚いている暇など無かった。

「涼宮ハルヒの肉体はどこにあると思う？」

俺の背後に不気味な女の声が聞こえてくる。

後ろを見ればロープに身を包む見知らぬ女？

顔がフードにより隠れて見えない。

「いきなり黒板を斬るから驚いた。危うく真つ二つになるところだったわ」

「……そう」

おいおい長門、それだけかよ。

「涼宮ハルヒの肉体と精神の分離が成功したの、大変だったわ彼女の自我が強くて引き離すのには時間がかかったんだから」

長門の表情が陰しく感じるのは何故？

それだけじゃない。

机や椅子も教壇も密かに揺れている。

この揺れは震度2くらいだろう。

「珍しいわね、あなたみたいな存在が怒りを感じているなんて」

女は楽しそうに笑う。

確かに長門が怒るなんて信じられない。

「消去実行」

ナイフが俺の横を掠る。

頬で何かが垂れた。

恐る恐る手で触ると、それは血だった。

長門さああん！？

「ちょっと待て待て、こんな狭いところで暴れるつもりかよ！」

さすがに俺は戦えん。

「……平気」

「これはあなたの夢だし、もし何か当たって死んでも目覚めるだけだと思っけどなあ」

よく見るとナイフが女の腹部あたりだろうか、ロープ越しに刺されている。

嘘だろ？ 平気なのか。

そうこう考えている内に次々と長門の放つナイフが女に向かっていく。

伏せることしかできない俺は隙を見て教室から出ることに成功。

「夢から覚めようと思わないの？」

聞き慣れた声が俺の脳内に響き渡る。

紛れもなくハルヒだ。

「そりゃあ……な」

「どうせあたしと有希ちゃんだって、あんたの夢だけの存在なんだからいいじゃない。夢から覚めればまた普通の日常に戻る。本当のあたしも有希ちゃんだっているのよ？」

苦痛にも聞こえるハルヒの声。

そうか、精神だけになったのか。

「肉体はどうした？」

「知らない。あの女が別の世界のどこかに保管したんじゃないの？」

それは駄目だろ。

「夢だとしてもだ、死んで覚めたくないし中途半端な夢もなんか嫌でな」

「……」

「肉体取り戻して、お前を捕まえてさっさと帰る」

「あっそ」

それからハルヒの声は聞こえなくなった。

「さて」

あの女のことは長門に任せて、肉体を探しにいくしかないよな。俺はとにかく他の室内を見てまわる。

理科室のドアを開けて前を見て俺はまた閉めた。

保管したみたいなことハルヒが言ったから遠くにあるかと思ったら意外と近くにあるんだな。

しかも、裸だと!?

俺は考えた。

そもそもどうやって引き離れたやつを元に戻す?

ハルヒは中身あれだが外見ナイスバディだ。

なんというか、やはり俺は男だ。

知っていたとしても、少々の抵抗はある。

どうするよ俺!

汗が止まらない。

「ん?」

頭の上から石が落ちてきたと思えば何かの破片。それと同時に学校全体が揺れ始める。

「まさかのまさか!?!」

崩れる。

俺は急いで理科室のドアを開けようとした。

だが、今の揺れでドアが壊れてしまったのか、開かなくなっていた。嘘だろ? ハルヒの体がすぐそこにあるのに……。

「ハルヒ!」

叫んでも無駄なのはわかってるさ。

それでも俺はひたすらハルヒの名前を叫びドアを壊そうとしたがま

まったくビクともしない。

地面が割れた。

ハルヒの体は瓦礫ごと俺の視界から消え、俺も下へ落下する。

「ハルヒ！！」

ハルヒの体が近くにあるはずなのに手が届かない。

夢から覚めたくない。

もしもこのまま夢から覚めたとしたらハルヒに会えない気がしたからだ。

あともう少しだ。

手が届く。

握れた。

だが、下は地面だ。

俺は目を瞑った。

第4話（後書き）

文章下手なので読まなくとも見ていただけるだけでも幸いです。

第5話

体がだるい。

目が覚めて思ったことはまずそれだけだ。

周りは何もない荒野でただただ平べったい地形が続いているだけ。
俺が起きると必ず長門は近くにいます。
今回も長門はいた。

「涼宮ハルヒの肉体が行方不明。精神は確保完了」

「あの女は？」

「消去」

長門は白夜ともいえる空を見上げ歩き出す。

「誰もいないのか？」

「涼宮ハルヒの精神により新たな世界に成功した」

アホな。

こんな何もない世界をハルヒが創るはずがない。

「全ては皆無から誕生し、消滅していく」

長門いわく明日になれば景色が変わるらしい。
それまで日を待つのか。

まだ太陽は顔を出したばかりで、時間は結構ある。
遠くの谷から覗く太陽に俺は目を細める。

そもそもこれは俺が見ている夢のはずだ。

何故俺の思い通りにならない？

何故痛みがある？

長門やハルヒの目的はなんだ？

俺は長門に訊ねてみる。

「なあ長門。これは俺の见ている夢だよな？」

「……」

「俺の知ってる長門とは違うし、ハルヒだって様子がおかしい。長門、本当の事が聞きたいんだが」

何故だろうか、長門の目の色が変わった気がする。
しかも殺気という久しぶりの感覚。

「アダムとイヴそれが涼宮ハルヒと私の望む世界」

長門の声が徐々にエコーが入っているかのように響き始める。

「あなたはあの時消滅してもらった予定だった」

あの時というと、古泉が引き連れてきた死刑執行人に殺されそうになった時だよな。

「長門有希の邪魔が入ってしまった」

は？

「おい長門、何言っているんだよ」

お前しかいないだろ。

今まで見たことのない笑みが長門の表情に現れる。

長門の体が足から砂のように消えていく。

その代わりに見知らぬ誰かの体が見えはじめる。

啞然とするしかない。

「長門さんをなんとかして追い出しましたよ」

男の声が変わる。

長門の姿が消えたと同時に見覚えのある姿。

ここまできるとなんだか笑えてくるぞ。

説明してくれよ、ええ？

「古泉」

「驚きましたか？」

久しぶりの爽やかな笑みが俺に向けられる。

気持ち悪いからやめてくれ古泉。

「まさかの予想外ですよ。長門さんが入ってきたときは焦りました」

「で、これは俺の夢と違うよな？」

「少し違いますが、新たな世界です」

どうやらここは俺だけの夢ではなくハルヒや古泉の夢の中でもあるらしい。

それを造ったのはハルヒと古泉。

「これは独断です。決して機関は関係ありません」

「どういう事だ？」

古泉はいつもより真剣な顔だ。

「こんなことをするのは本当はしてはならないことなのですが、ただ見ているだけは嫌になったのです」

つまりはなんだ？

ハルヒの事が好きということなのだろうか。

「涼宮さんを愛しているんです」

問題発言にもほどがあるだろう。

苦笑しそつにもなるが、ここは我慢。

「この世界は夢という形で涼宮さんは好き放題やっています。僕は

ただいつものように付き従っていましたがある時突然あなたはやってきました」

そつえばいきなり牢屋にいたもんな。

「それは涼宮さんが出てきて欲しいと望んだからですよ」

「なっ！」

ハルヒ、別に呼ばなくてもいいじゃないか。
この夢は一体いつ覚めるんだよ。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか」

古泉、まさかその手に持っているのは……。
紛れもなく拳銃だ。
なるほど殺して覚ますつもりか、勘弁してくれ。

「は、ハルヒの体はまだ見つかってないだろ!？」

「いえ、居場所はわかってますよ」

ああ、そうかい。

近づいてくる古泉。

俺は何も持っていない。

逃げるしかないとわかった俺は平地の荒野を走りだした。

「涼宮さんの精神は今僕の手にあります。どんなことも自由自在にできるんですよ?」

古泉の言った通りだ。

俺の目の前に大きな壁が現れた。
行き止まりかよ。

「あなたが望む普通の日常が覚めればありますよ」

そうだな、最初の頃はそう思ってたさ。

だが古泉。

「悪いが、俺はハルヒやみんなと一緒にある非日常なことが楽しくてな」

「……」

「覚めたらお前とハルヒがいないなんてことはゴメンだ」

「……あなたの存在が一番わかりませんよ」

古泉は笑う。

だが、銃口は俺に向けられていた。

ヤバいな、さすがに。

今度こそ終わりかよ。

俺はなんとかこの場を逃げ切ろうと辺りを見回す。

「……解除」

今度こそ本物だよな？

聞き慣れた声に俺は古泉同様上を見た。

それはまさしく制服を着た相変わらずの無表情で無口な宇宙人がい

た
……
。

第6話

長門……。

白夜の空がパズルのピースように崩れる。

「なっ!？」

構えていた拳銃が長門が投げたナイフで弾かれる。
ナイスだ長門。
今度何かを奢るぜ。

「涼宮ハルヒの身体に影響なし、精神は安定。1分後に接続完了」

「さすがですね」

古泉は諦めたのか微笑みながらその場に座り込む。
長門の手にはハルヒの精神らしき丸く青い光。

「接続、完了」

辺りを見ると、緑豊かな草原と爽快な青空に変わっていた。
無風だが先程の景色より断然いいに決まっている。

「さて、僕は消えるのでしょうか」

古泉は粒子となり徐々に透明になっていく。
ってなんだこの展開。

「元に戻っても会えるんだろ!？」

爽やかな笑顔で消えていくが、何故かム力つく笑顔ではなく切ない。

「目を閉じて」

元の世界に戻すらしい。

俺は少々不安を抱えつつ目を閉じた。

いつもと変わらない日常に戻ったが教室にハルヒが来ることはなかった。

いつもの部室。

ハルヒはいない。

「長門」

長門がパソコンをいじっているだけだ。

「涼宮ハルヒは私の部屋で寝ている」

「はあ、そうか」

夢といえど別世界。

痛みや疲労を感じるんだからそうなるだろう。

俺もよく起きたもんだよな。

「……古泉は？」

「自ら消滅しようとしていたけど、涼宮ハルヒの力によって阻止された」

なるほど、今頃古泉は驚いているだろうな。

「涼宮さんには言葉じゃ足りないくらい感謝しています」

背後からのさわやか極まりない声。

「で、ハルヒのこと諦めたのか？」

「さあどうでしょうね、涼宮さんは僕の計画に反対せず手伝ってくれました」

どんだけハルヒのこと好きなんだか。

当の本人は休みだしという理由で古泉を手伝おうと思ったのか聞かないと今まで振り回された俺の気持ちが収まらない。

「まあ涼宮さんにはしつかり説明したわけではないですし、面白そうという気持ちだったんでしょうね」

古泉はそう言って笑顔を残したまま帰っていく。

ここにいてもしょうがないし、朝比奈さんも来なさそうだしな。

「さてと俺も、って」

長門がいない。

帰ったのか？

いつの間に……。

俺が鍵を返さなきゃいけないのかよ。

俺は現実の世界である非日常な出来事が楽しい。

そう思えてきたのもハルヒや朝比奈さん、長門、古泉のおかげでもあるかもしれん。

さて、さっさと帰るか。

部室を閉め、俺1人の足音だけが廊下に響いた。

第6話（後書き）

読んでいただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5848h/>

涼宮ハルヒの創世

2010年11月20日15時13分発行